大学院生交流

中明　加奈枝
教職大学院教育実践コース２年

北京師範大学珠海分校の学生と、大学院での学びについて交流する場が設けられた。北京師範大学珠海分校からは２名の学生が大学院での講義や実習、ゼミを通しての学びや研究内容について発表した。

新潟大学教職大学院からは私が院生代表として、大学院で、自身の課題意識を探求テーマにどのように結び付け、講義と長期実習を通して、理論と実践往還によって知識と技術を積み重ねながら、目指す教師像に近づいていく日々の学びの様子について発表した。中国の生徒の質問で、この体制のよさについて質問され、私は、現職の先生と協働的に学び、意見を交換したり、経験を基にしたアドバイスを頂けたりする環境の素晴らしさを答えた。

中国の学生の発表の中に、授業実践時の生徒の姿を通して、「教師が教えたいことを教えるのではなく、子ども達が学びたいことを学ばせなければならないのだ」と気づいたという話があった。それに対して、新潟大学教職大学院の現職院生が「２０年近い教員生活を通して私が気づき実感してきたことを、その若さで気づき頑張っている姿に感動し、また、子どもの成長には日本も中国も関係なく同じ課題があるのだと感じた」と話をし、さらに「そのことに気付くきっかけになった事柄は何か」と尋ねた。その質問に対し、中国の学生は、大学の講義で教授が、日本の教育学者である佐藤学さんの著書を取り上げたことについて話をした。佐藤学さんの教育観に感銘を受け、「教師の学ばせたいことが、子どもの学びたいことに合致する必要性」の視点につながっていったと答えていた。

訪中事業を通して、私は、中国が日本や海外の教育論やシステムを学び、各学校法人が新しい教育体制やシステム、技術を常に取り入れながら成長していこうとする姿を目にすることができた。このように、中国と日本という異なる教育体制であっても、学び、成長する子どもの姿は同じであり、教育が子どものためのものであることも同じであった。また、そこで教師や教職を目指す者が抱える悩みや思いも同じであることを知った。子どもの力を伸ばすための働きかけとして、日本とは異なるアプローチを知ることができ素晴らしい学びになった。